

第89号

昭和59年1月25日

内容

日本の資本主義経営意識の
形成と特質……………1~2
第10回記念国際学生セミナー……………2~4
第6回大学合同セミナー……………4~5
千人会……………5
第124回大学共同セミナー……………6~7
第20回大学教員懇談会……………8~9
法人ニュース……………9
日本地球化学会年會を開催して……………10
わたしたちの合宿……………11

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

〈所在地〉

東京都八王子市下柚木(☎192-03)

電話 0426-76-8511~3

振替口座 東京 5-7 4590番

編集

大学セミナー・ハウス

企画室

編集人 中川秀恭

発行人 吉川孔敏

製作 中央公論事業出版

近代日本における経営思想の特色を論ずることは、近代社会における企業経営のもつ一般の原理を、いかにして日本人が自らのものにする事ができたか、あるいはそれが日本の文化的、歴史的土壌の上で、いかに修正、具体化されたかという問題を問うことである。私は以下、経営や経済思想が、日本の近代社会の形成過程において果たした役割や意味を論じてみたい。

商売をしたり、貿易をしたりする企業体というのは、必ずしも近代資本主義社会になって、初めて出てきたものではないことはいうまでもない。たとえば、元禄時代の紀伊国屋文左衛門、『ベニスの商人』に描かれているシャイロックやアントニオなどは、大変な金もうけをした大商人であった。近代以前においても、それなりに一定の経営組織体としての体裁を整えていた企業体(経済「内」合理化を行なっていた企業体。たとえば複式簿記の利用など)は存在していたのである。それでは、そういう特権の商人や投機的、冒險的商人のあり方と近代の資本主義的な経営組織体としての企業は、どういふ点で異なっているのだろうか。

近代の資本主義経済の基礎をなす資本主義的企業の特徴は、私有財産制と社会的分業の徹底した展開にあるといえる。近代の資本主義的市場においては、私有財産が社会的の隅々まで浸透して、共同的体的な小さな再生産や自給自足的な経済は分解し、労働力を含めて一切のものが全面的な商品交換の中に巻き込まれている。そこで

は、競争、利潤の追求、再投資が絶えず行なわれており、それら全体が資本主義社会における価値法則のつらぬく自由市場(経営外または経営間合理性を要求する市場)を生み出している。その結果、資本主義的企業体は避けがたい社会的必然としての市場における競争の中で、利潤をあげるために、絶えざる合理化と能率化という永久革命的な自己革新の要求に晒されているわけである。

第6回大学合同セミナー 全体講義から



日本の資本主義経営意識の

形成と特質

東京外国語大学教授
長 幸男

たのではない。そこには利潤をふくんだ安くて良い商品を生産し流通させる合理化と能率化という合理的精神が貫いていた。真に正直で(価値法則をつらぬく)、勤勉で(生産性をあげる)ある人々こそ、その努力の結果として利潤をうみだすという原則が働いていた。それこそが、M・ウェーバーが指摘した世俗内禁欲の職業倫理、プロテスタントの倫理として、近代形成期の中産的生産者層をとらえた精神であった。それでは、西欧ではこうした形で資本主義的精神における古いものから新しいものへの転換があったとすると、日本に

おいてどのように行なわれたのであろうか。

徳川中期に出た石田梅岩は、商人は社会にとって、ものを流通させるのに必要な必須の職業であり、当時の土農工商の世にあって、賤められていた商業が、天下の有用な職業であることを主張した。商人は特権に依存して不当な金をもうけたり、彼にとって必要なのは正直さや倫理ではなく要領のよさであるといった当時の社会的風潮に対して、梅岩は商業と自らを儉約して、安いものをよりたくさん人々に提供するサーヴィスを行なう倫理的な職業であり、その

結果得られた利潤は決して不当なものではなく、正当で社会の役に立つからこそ利益が上がるのだと説いた。こうして彼は商業とそれに基づく利潤を倫理的に肯定したのである。すでに江戸中期の日本において、ちょうど西ヨーロッパのビュリリタニズムの禁欲の倫理と相对应するような倫理観が生まれていたことに注目しなければならぬ。

この梅岩の思想が、いわば産業資本主義の時代における流通を担当する商業資本の思想を示したとすれば、徳川後期の二宮尊徳は農民と生産者の思想を表わしている。儒教の古い体系である朱子学では、個人の倫理と自然の法則は一つに繋がっていると考えられていたのだが、尊徳は人間が踏み行なうべき倫理としての人道と自然法則である天道とを分離し、両者がうまく組み合わさって人間は生きてゆくのであると考えた。もし人間が、自らの従うべき独自の法則を認識しないで、天道のみ従って、欲望でも何でもありのままに肯定してしまうならば、それは一種のアナーキーな思想に陥ってしまう。自然をそのままにするのではなく、人間は自然的なもの、人間的な価値や目的に則して制御、操作しなければならぬのであり、自然法則の認識を通して、それを人間のためになるように使ってゆかねばならないと、彼は考えたのである。このようにして尊徳は、いわば人間が自らを人間化するための基準としての人道を主張することによって、人間の持つ主体性を強調したのである(次ページ4段めへつづく)

第10回記念国際学生セミナー

主題Ⅱ 発展と平和のモデルを求めて

——環太平洋の課題——

期日——昭和58年10月28・30日

△特別記念シンポジウム▽

(記念講演) 平和と発展の追求——
日本の外交政策——
京都大学教授 高坂正堯氏

(コメンテーター)
国際大学助教授
ジョン・ウェルフィールド氏

津田塾大学教授 鈴木一郎氏
日本経済新聞編集委員・元東
アジア総局長 斎藤志郎氏

△セクシオン演習▽

A アジア・太平洋の安全保障関
係 東京大学教授 渡辺昭夫氏

B 環太平洋経済協力
一橋大学教授 山澤逸平氏

C 人物交流と文化交流——文化交
流は人に始まり人に終る——
国際交流基金人物交流部受入課
長 浜西栄一氏

放送教育開発センター教授

D 開発と技術協力

国際協力事業団青年海外協力隊
事務局 神谷弘司氏
国際協力事業団派遣事業部
鈴木信一氏

E その変容

立教大学教授 青柳真智子氏
帝塚山大学教授 高山 純氏

△運営委員▽

早稲田大学教授 菊地 靖氏
(委員長)
一橋大学教授 山澤逸平氏

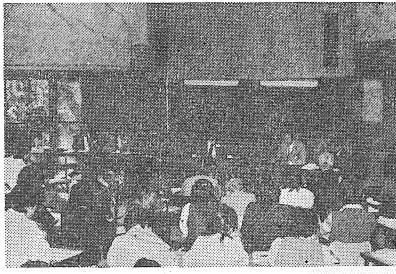
放送教育開発センター教授
阿部美哉氏

国際交流基金人物交流部受入課
長 浜西栄一氏

△参加学生▽87名(内女子29名)

①国籍別(計10ヵ国)——日本
(71)、韓国(4)、中国(3)、ソ連、
オーストラリア(各2)、オランダ、
シンガポール、フィリピン、タイ、
マレーシア(各1)

②大学別(計27校)——東大(12)、
東京外国語大(11)、一橋大(8)、
津田塾大(7)、学習院大(6)、立
大(5)、筑波大(4)、法大(3)、
慶大、東京電機大、日大、武蔵野
女子大、明大、早大(各2)、埼玉
大、千葉大、東京学芸大、大阪
大、都留文科大、国際商科大、I
C、上智大、中大、東京女子
大、東京理科大、明治学院大、電
気通信大(各1)、その他(6)



特別記念シンポジウム——中央は
高坂正堯氏(講演)

◇

国際的な教育活動を目ざして、昭和47年3月に発足した国際学生セミナーは、今年で第10回を迎えた。この国際学生セミナーが、在日留学生と日本人学生に、学問と生活を通じた国際交流の場と機会を提供してきたことの意義は大きい。小さいながらも、このような試みが、ハウスの特色あるプログラムの一つとなり、ここに第10回を迎えることができたのは、国際プログラム委員会をはじめとする関係者各位のご努力、ご協力があったからであり、心からの謝意を表したい。

今回のセミナーは、「発展と平和のモデルを求めて」を共通テーマとするシリーズの二回目に当たった。副題には「環太平洋の課題」が選ばれ、日本と太平洋を取りまく諸国間との関係に焦点が絞られた。また、特に10回を記念して、別記のように公開の記念講演や特別シンポジウムが催され、セミナーのOBや来賓の方々が出席してこの国際学生セミナーの前途を祝福して下さった。

今日の激動する世界情勢の中で、世界の発展と平和を望むことは、これまでのように自国の国家利益のみを追求することではない。むしろ、それは地域協力・統合を中心とした他国との協調の上に国際関係が樹立されなければならないことを示している。21世紀に向けて大きな潜在的活力を秘めた環太平洋諸国の社会経済開発や文化発展のために、日本が果たすべき役割は何かを、太平洋諸国の人々を主人公にした立場から考え

◇(前ページよりつづく)

以上のようにして徳川時代には、少なくとも経済の面から考える場合に、近代を形成する思想の萌芽が形成されていたのであり、明治以降、日本が西欧の資本主義的な商品の流入に巻き込まれ、裸で世界市場と対峙しなければならなくなった時に、徳川期に出てきた、こうした日本の生産的な思想が、その土台をなすことになったのである。

最後に、明治以降、資本主義的企業がどう形成されてきたかという点に関していえば、渋沢栄一やその他のおおくの実業家たちにとって、儒教的倫理が大きな役割を果たしてきたことも見逃がせない。彼らにとって、儒教的倫理は商売や実業をする場合の倫理的基準でなければならなかった。ところで、この儒教倫理とビュリタニズムの倫理とはどうつながるのであるか。M・ウェーバーは、現世肯定的な儒教と現世否定的なビュリタニズムを対極において論じ、自己否定を媒介とする永久革命的な思想を核心に持たない儒教は、資本主義的な企業形成には阻止的であると述べている。ビュリタンの信仰は絶えず自らの生活を

ていくことはきわめて重要である。このような視点に立って9ヵ国から16名の留学生を含めた総勢87名が、三日間にわたって熱心な討議を積み重ねた。

や行為を厳しく自己審査してゆくものであったが、性善説に基づき、儒教は、遵守すべき基準として、先王の道としてこの世にできあがった秩序を立て、天子を頂点とした現世の秩序への順応を説く。維新の後には、西欧にできあがった資本主義的階層秩序を、経済面では、いわば「先王の道」に代位させる。順応し忠誠をつくす対象として資本主義的秩序がうけいれられた。儒教においては、家族道徳が基本にあり、それは超越的な神と個人の繋りにではなく、人間同士の間の中に倫理を求める。このような人間のヒエラルキーに基づいて倫理が決まってくるという儒教の価値体系が日本の実業家の理念の中に深く入り込み、日本における資本主義形成や企業形成の原理になりえたのである。西欧においては、ビュリタニズムの倫理が近代的経営の礎となり、日本では儒教の精神がその理念となりえたという点に、経営家族主義や集団主義とさまざまな問題の根があるのである。

(第6回大学合同セミナーの全体講義より。
文責・編集者)

セッションに入った。これから始まる各セッションの演習内容をめぐって、各指導教授から大要次のような話があった。

○渡辺昭夫氏 環太平洋連帯構想は、環太平洋地域の多様性を前提とした野心的な地域協力の試みである。重要なのは、外に対してはこの連帯が閉鎖的でない「開かれ

「地域主義」であるということであり、内に対しては、それが南と北という対立の図式を超えようとしている点である。太平洋諸国の住民の視点から、この地域の多様な安全観と脅威観を分析することによって、自分たちの安全を脅かす問題がどこにあるのかを見定めたい。また、そのためには狭い伝統的な安全観を超える必要がある。環太平洋連帯構構想が総合安全保障とロジカルに繋がっているというのが、私の問題提起である。

○山澤逸平氏 歴史・文化・経済・政治において多様性に富んだ環太平洋地域の経済協力は、ECやEPCとは異なる独特な条件を持っている。経済的に大きな格差のあるこの地域の経済協力は、い

【記念講演要旨】

平和と発展の追求

日本の外交政策

高坂正堯



京都大学教授

今日の日本の安全保障政策と国際経済政策を考えた場合、第一に今までの日本の外交政策は、日本がグローバルな規模で行動する通商国家であるという認識に基づいたものであり、第二に、日本が明治以降百年以上かけて作り上げてきたその基本的方向は、現在ではかなり安定したものになっている点をおさえることが重要です。その過程には脱亜入欧論に示されるような深刻な悩みや動揺もあったわけですが、戦後の日本がグローバルな規模で活躍できるようにな

るいろいろな国を包摂できる弾力的なものでなければならぬ。環太平洋連帯構構想は、日本だけに都合のよいものではなく、この地域全体にとって利益になるものであり、各々の国がこの地域協力に参加することによって得られる利益・不利益を具体的に考え、この構想が望ましいか否かを検討する。

○阿部美哉氏 発展と平和の問題の底には、常に文化の問題があるが、それは突き詰めれば何が良いか悪いかという判断の基準の問題である。良い事と悪い事は、相手の立場に立てば逆転する。それが文化交流の問題であり、生身の人間のぶつかり合いとして出てくるのが人物交流である。これらの交流には留学や学術の交流などさま

ったのは、技術の進歩、自由貿易体制の確立や軍事力を持たない通商国家である日本の性格など、戦後偶然に起こった日本にとって都合のよい国際環境の変化のためです。さらに、アジア・太平洋地域の諸国が経済的に速いスピードで成長するようになったことにより、日本が自然な形でそれらの国との関係を将来への希望を抱きながら持てるようになったことは、非常に重要だと思えます。私は、今後の日本外交のスタイルに基本的変化はないと考えています。日本は通商国家である以上、国際政治の現状に利益を持っており、現状を変えるような動きは安全保障上望ましくないからです。日本の安全保障政策の基本は、戦後の教訓を原則としつつ、非軍事的な要因によって、世界に貢献してゆくことでなければなら

ざまなレベルがあるが、最近では、国の責任で行なわれることが多くなってきた。現場に即して、文化交流と学者の交流の例として、国際交流基金と学術振興会をとりあげて検討する。

○神谷弘司氏 日本にいろいろな形で経済、技術協力を進めているが、援助される側の貧富の差はますます拡大されており、何のための援助かが問題になっている。援助によって恩恵をこうむるのは、限られた階層に限定されているのではない。このような批判を踏まえて、どういう開発や技術協力が望ましいかが考えられねばならない。現場が実際に抱えている切実な生の声を提供することによって、望ましい援助の姿を模索

せん。

その際、日本のとるべき経済政策と並んで問題になるのが、人種、宗教、文化的に多様で、政治的にデリケートなアジア・太平洋地域との関係です。日本がこのような国々と経済交流を増大させ、共同体を作ってゆくのは全く至難の技であり、それはどうしても現在のアセアンのような緩やかな共同体とならざるを得ないです。経済的に強大化したアセアンの諸国との協力は、日本のアジア・太平洋圏の外交の一つの核ですが、同時にこの地域に多くの政治的混乱の余地があることも忘れてはなりません。それだけに、日本にとって緩やかな共同体としてのこの地域に、政治的安定を与える政治的技術が極めて重要になってくると思えます。

(文責・編集者)

したい。

○青柳真智子氏 文化は、いろいろな文化要素が絡み合っており、一つの体系としてつくりあげられたものである。それは静止しているものではなく、外界から新しい文化要素が入ってくる、それに合わせ少しずつ動いてゆく。たとえれば、ミクロナシアの場合は、宗主国が政策を投げかけ、調和を保っていた島の文化がその政策を必死になって追いかけてゆくというのがここ数世紀の現状であった。発展と平和のモデルにしても、南太平洋諸国の蟻のような眼から見たものと先進国から見たものとは違うのではない。



「人類的」アイデンティティを模索する —セクション演習(セミナー室)

翌二日目の午後は、第10回を記念する特別記念シンポジウムが、学界や経済界などからの一般参加者を交えて、公開で開催された。国際プログラム委員会の中嶋嶺雄委員長の挨拶に続き、高坂正堯教授の冷徹な現実認識に基づいた日本の外交政策に関する講演が約一時間にわたって行なわれた(講演

の要旨は上掲)。

高坂氏の提示した諸問題を受けて、各コメントーターが、それぞれの立場から開陳したのが以下の問題点である。

▼日本の外交政策は高坂氏の提起しているグローバルリズムに則って激しい軍拡競争が続く中で日本がどのような安全保障を自己の役割として確立し、より広い地球的視野から地域協力をなし遂げてゆくのが問題である——J・ウェルフィールド氏

▼国家の存在そのものに対して、根本的な反省が少しずつ出てきている。戦後の日本の発展の背後には、憲法第九条による軍事産業の禁止があり、日本は、この三〇年間で軍事力に頼らないでも平和な国際関係を維持することが可能であることを示してきた。これは知識ではなく日本のメッセージであり、われわれは、このことを敵爾に考えなければならぬ——鈴木一郎氏

▼脱亜入欧という近代史の流れの中で日本はアジア・太平洋との共通の基盤をつくるために、何らかのフレームワークを必要としている。日本が説得力のある行動をするためには、それは太平洋戦争中の一種の贖罪意識や罪悪感を超越するような枠組でなければならぬのではない。——斎藤志郎氏

フロアーからも「日米安保条約に依存した戦後日本の繁栄は本当に世界に対して誇れるのか」、「国際政治において日本が哲学を持てる」とすれば、それはどのようなのか」といった疑問や質問が提出(次ページ4段めへつづく)

第6回大学合同セミナー

主題Ⅱ近代の経済および経営思想の生成

——イギリス・アメリカ・日本の事例を中心に——

期日——昭和58年11月11（13）日

Ⅰ全体講義

日本の資本主義経営意識の形成と特質
東京外国語大学教授 長 幸男氏

長 幸男氏

Ⅱセクション演習

A アメリカにおける18世紀の経済思想——フランクリンを中心として——
明治大学教授 田村光三氏

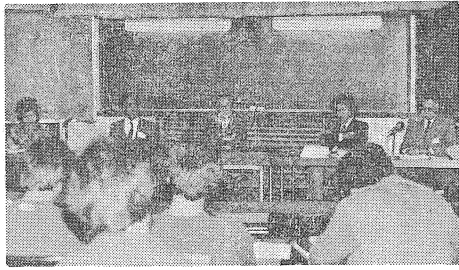
B 社会進化論とアメリカ資本主義——人間観の変遷を中心にして——
国学院大学助教 寿永欣三郎氏

C 「高賃金の経済」と管理思想の生成——D・デフォーからF・W・テイラーまで——
中央大学教授 山下幸夫氏

D イギリスの経営思想——勞使関係の文脈のなかで——
明治大学短期大学学長 岡山礼子氏

Ⅲ運営委員

中央大学教授 山下幸夫氏
明治大学教授 田村光三氏
参加学生 65名（内女子13名）
中大（24）、明大（21）、国学院大（11）、明大短期大（9）



パネル・ディスカッション：右から田村、寿永、長、山下、岡山の諸氏（講堂）

あるいは経営思想の名で呼ばれる近代の思想が現代社会形成に果たした役割を、イギリス、アメリカ、日本の事例を検討するなかで、説明することを旨とする大学合同セミナーが中央、明治、国学院、明治大短期の四大学から六五名の参加者を得て開催された。セミナーは四つのセクション演習、全体講義、パネル・ディスカッションそして全体集会から構成されている。

二日目の午後一時半から三時までは、「日本の資本主義経営意識の形成と特質」についての全体講義。そのあとティー・タイムを挟んで四時から六時までパネル・ディスカッションが展開された。長氏はフロントページに紹介したとおり日本の資本主義的経営意識の形成にとって儒教倫理が大きな役割を果たしてきた点を指摘されたが、この点をめぐって活発な討論がなされた。特殊日本の儒教倫理と資本主義精神の関係、「経営家族主義」と農村共同体の「家」制度のつながり、日本文化にみられる集団主義的傾向の深層構造など、先進国の中でも経済的に安定した成長を続けている日本の経営およびその思想の評価と内実を様々の観点から議論した。

最終日の全体集会是学生議長団の手際よい進行に支えられ、終始、活発な討論が繰り広げられた。具体性を備えた生の現実認識を必要とするテーマであっただけに、ともすれば議論が技術的問題の操作処理に傾くきらいがあったにもかかわらず、安全保障といった場合の「安全」とはそもそも何か、また何から何を何のために守るのか、各国が相互依存を深める中で単なる「文化」接触を超えて、「素顔の見える」文化「交流」を成し遂げるためにはどうしたらよいか、日本人としての自己の確立とグローバルな視野からのもの見方はどのように関わるか等等、核心に迫る問題が次々と学生から提起された。

現在、世界のコミュニケーションが直面している非常に複雑な情勢の中で、人的交流と意見の交換が大事なことであることは、疑う余地はありません。大学セミナー・ハウスはその意味で、大変大きな役割を果たしていると思います。ごく単純な考え方ですけれども、今後、私たちはここで議論されるテーマを、実生活に近づければよいのではないのでしょうか。

環太平洋連帯構想のテーマは、言うまでもなく大事なものです。しかし、グローバルな緊張緩和の問題と軍縮の問題は、さらに重要なものです。各国は、戦争の危機を回避するためにどのような努力を払っているか、また払うべきか。このようなテーマをめぐって広く議論することは、参加者の社会人としての育成にも、大いに貢献するのではないかと考えます。今後、機会があれば、大学セミナー・ハウスで催されるこのようなセミナーに、ぜひ参加したいと思っております。

東京外国語大学外国語部 研究員
チチャエフ・セルゲイ（ソ連）

る質疑応答、さらにはセミナーのテーマに肉迫する意見の応酬が展開された。紙幅の関係でその内容を紹介できないが、別掲の参加者から寄せられた感想文が示すように、このセミナーが各大学のゼミの相互交流による啓発の場として大きな作用をしたことは間違いない、山下氏をはじめとする諸先生の熱意と、それに呼応した学生たちの意欲的な姿勢が伝わってくるセミナーであった。

最後に、今回の成果を踏まえて、次年度に第2回が開催される予定であることを付言しておきたい。

千人会

◆現在会員は一、六九三名です

大学人Ⅱ一、二六八名

社会人Ⅱ 四二五名

◆新しく会員となられた方々

14名(第71回報告(申込順))

C 工学院大学教授 岡村 浩殿

A 日本経済新聞論説委員 黒羽亮一殿

B 日本大学生産工学部教授 伊藤清和殿

C 松下政経塾塾生 本間正人殿

C 横浜国立大学大学院生 五十嵐 香殿

C 津田塾大学教授 鈴木一郎殿

A 日本女子大学教材課長 合田信子殿

B 明治大学短期大学学長 岡山礼子殿

C 東京電機大学教授 井関 昇殿

感想

中央大学・3年 山本清孝

われわれ中央大学の参加者は、この合同セミナーのために、直前まで週四時間ほどのサブゼミを行ない、自分たちなりにある程度の準備をしてきたつもりでした。しかし、演習が始まってみると、思ったように意見も言えず、重苦しい雰囲気ははじめてしまいました。

私が参加したBセクションでは最初に先生のほうから問題を提起していただいたのですが、われわれにとっては、それがつまずきの

もとになってしまいました。というのには、先生からの問題は「社会科学はほんとうに存在するのだからか」とか、「社会進化論の現代における意義は何か」といったような、非常に大きくて深いもので、日頃から考えていないとなかなかその場では答えていくものばかりだったからです。

それに対してわれわれが用意した質問は個別的で、社会進化論のかなり細かい点にまで立ち入ったものがほとんどでした。そこでまづわれわれの個別的な質問についての議論を行ない、社会進化論の内容について、ある程度の認識が

得られた段階で、先生から提起された問題を話し合うことにしました。こうして、非常に円滑に演習が行なわれ、予想以上の成果を得ることができたと思います。

感想

国学院大学4年 大田義昭

大学セミナー・ハウスの名称から想像する建物は、超近代的なシステムを備えた合理的なものでしたが、実際、訪れてみると私の想像はみごとに打ち砕かれてしまいました。そこは小高い丘というよりは、もう背丈ある堂々とした山で、自然が大威張りで居座ってお

り、それに宿舍、図書館、本館がへつらっているという感じでした。たとえるならば、下界から孤立した山小屋というところでしょいか。勉強をしに来たのか、足腰を鍛えに来たのかわからないというのが最初の印象でした。

しかし二日目ぐらいから、このような生活もなかなかいいな、と思いはじめたのです。知識を詰め込んでオーバードライブしそうな感じが、外へ出るといい気分転換になっているのです。最後には、身体と勉学との相関関係をよく考えた素晴らしい環境づくりがなされているなあ、と感心するほどでした。

昭和58年10~11月

寄付金報告

58年10~11月

△教育プログラム資金▽

一五、〇〇〇円 第10回国際学生セミナー

二、三〇〇円 参加者一同殿

二、三〇〇円 第6回大学合同セミナー

九、五〇〇円 参加者一同殿

四、〇〇〇円 第124回大学合同セミナー

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

同 参加者一同殿

田時男、浅見一羊、山本登、高野雄一、本間正人、田村院司、戸田盛和、伊藤玄三、磯部浩一、安達義明、中沢正和、バックス・ジャーン、緒方真也、堀江忠男、角尾稔、藤林宏一、石川正一、宇都栄子、高木仁、小川捷之、飯野利夫、宇野義方、吉武泰水、高橋七五三、山本大二郎、満尾寿男、田原虎次、山本よし急、馬場明男、八戸信昭、笹島恒輔、野口武徳、岡島真理、岡山礼子、中井虎一、国分康孝、金子保、田中外次、水野伝一、竹内喜代司、山口貞雄、田村光三、中尾由矩子、今井哲哉、阪田正三、宇野重昭、松本樺太、竹内与之助、末永国昭、隈部直光、下川浩一、森繁雄、速水佑次郎、大神田正義、納富照枝、谷重雄、平島正喜、清水雄二、外池孝雄、小松八郎、木下是雄、木村久男、高橋正男、村井資長、奥繁光、石川明、松元文子、山下幸夫、安藤瑞夫

△植樹資金▽

三〇、〇〇〇円 日本フードサービス

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

同 カレッジ殿

特別演奏会出席者殿

第124回大学合同セミナー

指導教授 船山信子殿

一般寄付金

五、〇〇〇円

五、〇〇〇円

二〇、〇〇〇円

八、〇〇〇円

成蹊大学安藤ゼミ殿

おさひめ幼稚園殿

野村タチヤーナ殿

日本フードサービス

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

カレッジ殿

第124回大学共同セミナー

主題Ⅱ 藝術のたのしみ (第5回)

—— バロック概念の再検討 ——

期日——昭和58年11月25〜27日

△ゲスト講演▽

東京文化会館館長 遠山一行氏

△シンポジウム・講話▽

東京芸術大学助教授 若桑みどり氏

東京大学教授 辻 惟雄氏

上野学園大学助教授 船山信子氏

お茶の水女子大学教授 徳丸吉彦氏

△特別演奏▽

(チェンバロ) 渡邊順生氏

(バロック・ヴァイオリン) 渡邊慶子氏

(ヴィオラ・ダ・ガンバ) 平尾雅子氏

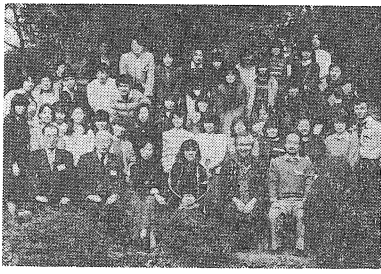
(譜) ミシエル・ワッセルマン氏

△運営委員▽

お茶の水女子大学教授 徳丸吉彦氏

△参加学生▽36名(内女子26名)

上野学園大(4)、東大、東京外国語大、東京芸術大(各3)、お茶の水女子大(各3)



前列右から辻, 徳丸, 若桑, 船山の諸氏

に富み、充実した二泊三日をおくることができたのは幸いであつた。

◇

初日のプログラムは、遠山一行氏のゲスト講演によって開始された。西洋音楽だけでなく、広く美術にも精通した遠山氏は、氏にのつての「バロック的なるもの」を自らのヨーロッパでの豊富な体験を足掛りとしながら、具体的に話された。「藝術の空間が拡大される時に、そこには大なり小なりバロック的な傾向が起こってくる。音楽でも閉ざされた空間の中で成り立っていた古典主義音楽に比べて、バロック時代には、音楽空間がいろいろな国の民衆の音楽の場に広がってゆく。その意味でも、バロックは明らかに大衆化の時代の藝術だといふことができる。バロック音楽が一時の流行に終わらず、現代の音楽生活の中で大きな意味を持ち続けているのは、現代がバロック時代と共通の特徴を持っているからであり、現代はある意味で一つのバロック時代であるという気がする」

バロックを一つの時代を超えた歴史の恒定数として取り出し、それを藝術の大衆化現象として捉えた氏の見解に対して、指導教授も交えて活発な議論が展開され、参加者にとっては、今回のテーマに接近するための恰好の手引きとなつた。

夕食後は、若桑、船山両女史の発題によるシンポジウムAⅠⅤが開かれた。西洋を中心として美術と音楽の各領域から、バロックの基本的な概念を定義しておこうというわけである。

「美術における時代概念としてのバロックは一五八〇年代半ばから一七一四年までを指している。様式としてのバロック絵画の本質は illusionism にあり、それは、一つ一つの要素が分節的で、幾何学的に適度な均衡を保った古典主義に對して、常に動きを求めたり、理屈ではなく、人間の情感に訴える構造を持っている。バロックは正統的なクラシックを土台として、そこにマネリスムのダイナミズムを加えた第三の藝術様式であり、理性的ベースの上に情念のドラマを演じている点が重要である」(若桑氏)

「音楽では、16世紀のルネサンス、古典主義のポリフォニーと、ホモフォニーの確立される18世紀後半のウィーン古典派時代の過渡的時代をバロックと呼ぶ。バロック音楽は、各声部が無性格に均等に全体を作っているポリフォニー性を持ち、一つの声部が抜きん出て重要性を持ち、それが和声の性格を決めてゆくホモフォニーと違い、高音と低音の全く異なった両声部が、和声を限定しながらも、動機

の反復やカノンや模倣によって、その中味を決定してゆく形式になつており、規律の中の自由という点に特徴がある」(船山氏)

以上の問題提起をうけて様々な意見の応酬があり、時代区分における美術と音楽の違いなどについて一筋縄ではいかないバロック概念の持つ多様性が浮き彫りにされた形で、シンポジウムは22時過ぎに至って散会した。

二日目の午前と午後にはわたって配された四氏による講話は、前日

のバロックの基本的な概念規定を受けて、それを西洋の音楽と美術における具体的な事例によって検証し、さらに日本美術と音楽に適用した場合の可能性と問題性を追求する場である。若桑氏は西洋でバロックと漠然と呼ばれている時期が、実際は非常にバラエティーに富んだ時代であったことを指摘され、前日に提示されたバロックの共通要素に對して、イタリア、フランス、スペイン、オランダなど各国で、バロックがどのような特徴をもって展開されたかを豊富なスライドを用いて例示された。講話の後には、バロックの都市空間の典型・ローマのビデオが上映され、絵画や建築など多角的視野から西洋のバロック美術の構造が明らかにされた。

午後の講話では、初めに船山氏が、西洋音楽におけるバロックをミクロ的に見てゆくにために、フランスのバロック音楽の作品をとりあげ、特に古典主義音楽との相違を中心とし、実際に楽譜上に「バロック」がどのように表わされているかを提示された。音楽におけるバロック様式の特徴が、非常に高い形式性のもとに、その形式の均衡を破ってゆく情緒的なものの表現にあることが具体的作品の分析を通して参加者一同に明らかにされた。

交友館にてお茶を飲みながら、しばし休憩した後、辻、徳丸両氏によって、いよいよバロック概念を日本文化に適用する野心的試みが行なわれた。最初に辻氏が、普遍的な文化様式としてのバロックという考えを援用しつつ、縄文から江戸時代にまで至る日本美術史

におけるパロディ的なものやクラシック的なものをスライドを使って対比された。氏は桃山時代の城郭や霊廟建築、当時の歪んだ茶碗の例を示して、「桃山時代が一番パロディに近いのではないか」とされ、日本とヨーロッパ美術におけるパロディ的なものの違いについて、即興的な前者に対して、後者が構造的である点を指摘された。

続いて、徳丸氏は日本音楽の専門家の立場から、特に江戸時代の音楽に焦点をあてて、西洋のパロディ概念が日本の音楽に適用できるかどうかを検証された。長唄と地唄、義太夫、また琴や胡弓等を組み合わせた三味線音楽が豊富なテープを用いて紹介された。氏は日本人が西洋人と違って、前にあったものを捨てることなく、うまく共存を図りながら、様式を変化させ、生きた伝承を重視してきた



パロディ音楽の生演奏に接して、左は楽師の説明をするチェンバロ奏者・渡邊順生氏



たことに注目し、次のような仮説を提示された。「不連続性という観点から、西洋音楽と日本音楽の歴史的前後関係を見た時、パロディと江戸時代に一種の類似した現象を見出すことができる。西洋のパロディ概念を導入することによって、日本の音楽を今まで気づかなかった視点から整理するきっかけが得られるのではないか」

夕食後は、「パロディと現代」と題されたシンポジウムⅡⅤⅥが、指導教授全員の参加によって催された。パロディという言葉が現代人であるわれわれ自身に跳ね返して、捉え直してみようというわけである。「現代との関連で、パロディが普遍化されるとすれば、それはいかなる根拠によってか」、「パロディ様式を成り立たせている音楽と美術に共通する理念は何か」など、今回のテーマの根幹に関わる論議がフロアも交えて盛況のうちになされ、「美が本当に日本の藝術にとって歴史的概念であったかどうか」(徳丸氏)といった斬新かつ興味深い指摘もあり、話はパロディを超えて、日本人にとっての藝術論にまで及んだ。以下は、このシンポジウムを閉じるにあたっての指導教授によるコメントである。「概念としてのパロディは、非常にたくさん属性を持っているが、その本質的要素は理性に對峙する attention にあり、それを完全に表現するためのあらゆる道具立てがパロディを形造っている(若桑)。「パロディの特徴は多義的で不明瞭性を持っている点に求められるが、その共通要素として人間の情緒とその表出を重んずる点があげられ

る(船山氏)。「パロディの内包する要素は非常に複雑で、その概念を拡大するには限界がある。パロディ概念は安易に用いられてはならないが、人間の持つイメージを連関させる能力は大事である」(辻氏)。

最後に運営委員である徳丸氏が「西洋のそれぞれの国で、パロディという言葉がどのように使われたかを再度検討し直すことを今後のシンポジウムを総括され、熱気に包まれた議論の幕は余韻を残して閉じられた。

◇ 最終日は午前10時から、「生きたパロディ経験」を得るための場として本セミナー中のいわば庄巻のプログラムである「特別演奏会」が公開で催された。透明な冷気の流れる晩秋の朝、今回のテーマに則って厳選された次の曲目が、第一線で活躍中の若手演奏家の方々によって奏でられた。

ビーバー「ソナタ10番ト短調」、ロワイエ「スキタイ人の行進」、マレ「膀胱結石切開手術図」「快癒の祝い」「迷宮」、ラモ「コンセルトルによるクラブサン曲集」

聴衆に与えた感動は、「今までのパロディ音楽のイメージが崩されるような強烈な体験」と表現した参加学生の感想に尽きているように思われる。「生きた藝術作品を享受しながら、その新たな創造へと学生たちを促すような雰囲気と場所づくり」を目指して、この丘に誕生した藝術セミナーは、こうして、その目的を全うし、三日間のプログラムを終了した。最後に、このセミナー実現のた

め、企画の段階から運営全般に至るまで多くの労をとられた運営委員の徳丸氏と演奏家の交渉や選曲に加えて、自らも演奏会の司会をつとめて下さった船山氏、そして朝7時にチェンバロを搬入し準備をして下さった演奏家の方々に對して、厚く感謝の意を表しておきたい。

お茶の水女子大学教育学部4年 杉崎 直美

体験と対話のすばらしさ
大学で美術史を専攻している私にとって、「パロディ」という言葉は十分聞きなれたものであったが、大学の掲示板でポスターを見ているうちに、用語や概念のみが先行し、生き生きとした内容を持つていない自分に気づいた。「自分にとっても再検討が必要だ」という思いに駆られ、中途の卒論に不安を残しながらも、とにかく申し込みにかけこんだのである。

当日は、様々な分野から四〇人近い学生や社会人が、それぞれの考えと疑問を「パロディ」に抱きながら集まった。音楽、美術の各方面の第一線で活躍中の諸先生方が、明晰な分析と豊かな含蓄を与えて下さった。白熱した討論が行なわれ、和やかな雰囲気の中に精力的にプログラムが進められていった。

この三日間で最も心に残ったもの、それを一言で表わせれば、「体験と対話のすばらしさ」だと言えらるであろう。芸術の研究も学問である以上、言葉による普遍的で明確な定義は常に追求されなくてはならない。しかし、言葉で説明

し、文字を追うだけではどうしても埋められない。芸術の豊かさから生まれてくる何かを、豊富なスライドとテープ、緊迫感と躍動感に満ちた生の名演奏に直接接することにより、自分なりに感じ確認することができたように思えるのである。そして、美術と音楽とを実際に体験することを通して、両者の共通項には、人間の感性や感情における芸術の位置を、また両者の差異には、それぞれの本質的な要素を少しだけだが理解できたようにも思える。

また、たくさんの方との対話も忘れられない。シンポジウムでの討論はもちろん、食事時間の先生方とのうちとけた会話、セミナーで知りあひになった友達との情報交換、曲やスライドの合間に話した印象や感想、そのようなふとした言葉が鮮やかに心に甦る。先生方に質問し、専攻の違う人たちと話すことにより、自分の「パロディ」に対する考えの誤りや曖昧さを洗い直すこともできた。

国際学生セミナーの演習風景が『アジアの目・世界の目』で紹介される

アセアン諸国からの留学生受入れが本格化するに伴い、アジアの在日留學生の問題がクローズアップされているが、NHK教育テレビでは二回にわたりこの問題の特集した。

11月22日の二回目で、番組の冒頭、「環太平洋経済協力」をめぐって討論した第10回国際学生セミナーIBセッションの演習風景が、約三分間放映された。

第20回大学教員懇談会

主題Ⅱ時代の変遷に伴う大学の将来像

期日—昭和58年10月8〜9日

▼発題講演

これからの大学教育はいかにあるべきか—その現状と将来—

日本経済新聞論説委員

黒羽亮一氏

文部省大学局大学課長

坂元弘直氏

▼パネル

め discussion

▲発題者▼

元千葉大学教授 木内信敬氏

早稲田大学教授 示村悦二郎氏

▲パネル よりよい学生選抜のための討論

▲発題者▼

慶応義塾大学塾監局長 関口研日曆氏

国際基督教大学教授 石川光男氏

▲運営委員▼

お茶の水女子大学教授



よろこそ広場に

尾田幸雄氏
水島義治氏
根岸愛子氏
上智大学教授 嶋山道雄氏

日本大学教授 尾田幸雄氏
東京女子大学教授 水島義治氏
根岸愛子氏
上智大学教授 嶋山道雄氏

▲参加者▼68名
慶応義塾大、東京女子大、電気通信大(各4)、お茶の水女子大、大妻女子大、中央大、東京経済大、日本大、法政大、明星大(各3)、千葉大、工学院大、ICU、上智大、成蹊大、津田塾大、東京理科大、白梅学園短期大(各2)、東京外国語大、東京農工大、東京工業大、青山学院大、杏林大、駒沢大、東京電機大、日本女子大、武蔵工業大、明治学院大、立教大、早稲田大、芝浦工業大、文京女子短期大、千葉敬愛経済大、東洋女子短期大(各1)、その他(3)

昭和45年に「日本における大学改革の反省と展望」をテーマに開催された大学教員懇談会に端を発し、ハウスのプログラムとして実施してきたこの懇談会は、今回でちょうど20回を迎えた。単位互換制、入試改革、国際交流、大学院問題、留学生問題など大学が直面している切実な問題を国公私の壁を超えて議論する場を提供し続け、通算して60数大学から千名の参加者を数えるに至っており、文字通り大学間交流の場となってきた。

戦後、大学進学者は年々増加し

大学は大衆化の道を邁進するが、学歴信仰に支えられた大学進学熱もようやく峠を越え、大学財政の公的補助が削減されるという情勢の中で大学はいま大きな転期に迫られている中で、冷静に現状を分析し、問題点を把握して大学の将来像を素描することが20回を迎えた懇談会の主旨である。

第一日のプログラムは、開講式に続き、水島義治氏の司会のもと発題講演が行なわれた。昭和57年度の高校卒業生一四五万人のうち高等教育進学者は過年度卒業生を含め八五万人、そのうち二〇万人が専修学校、一八万人が短大、四二万人が四年生大学に進学している。大学の大衆化現象の中で進学率は全国平均で三五%にほぼ定着してきているが、長期的にみると一九九〇年頃には「団塊の世代」の子弟が高校を卒業するため二〇〇万人に急増し、二〇〇〇年頃にはまた一五〇万人に急減する。進学熱も冷め進路選択はますます柔軟化、流動化した大学は専修学校と競合していかねければならない。

黒羽亮一氏はこのように現状を分析し、大学は中等教育との接続を真剣に考えていかねければならないとし、今後のあり方を次のように講演された。大学はいまや専門教育中心の研究機関から青年の人格形成をふくむ教育機関へとその性格を変えていかざるをえない。また、国際化社会のなかで活躍できる人材育成という社会的要請に応えるべく、語学教育を中心に中等教育との接続をはかっている。つづいて、文部省の坂元弘直氏は

大学は大衆化の道を邁進するが、学歴信仰に支えられた大学進学熱もようやく峠を越え、大学財政の公的補助が削減されるという情勢の中で大学はいま大きな転期に迫られている中で、冷静に現状を分析し、問題点を把握して大学の将来像を素描することが20回を迎えた懇談会の主旨である。

は、大学の制度的側面について講演された。大学・大学院入学資格の弾力化、修業年限の短縮、留学生の学位取得の柔軟化、短期大学設置基準の弾力化など「高等教育の弾力化」について説明され、高校卒業生の激増・激減にもかかわらず進学率は横ばい状態にあり、ようやく腰をすえて大学問題を根本的に考え直すことができる今日、国公私の壁を超えて大学側の方針なりを検討し具体的な改革案を提示していただきたい、と主張された。

発題講演の後、パネル(1)では、尾田幸雄氏の司会により一般教育問題を中心に議論が展開された。発題者の木内信敬氏は千葉大での経験を踏まえ、ゼミ形式による総合科目の設置によって現行の一般教育課程を活性化することは可能だが、従来のように一般教育と専門教育が画然と区別されている現状では実現は難しい。そこで、自分の専攻分野を講義すればそれは専門科目とみなし、それ以外は非専門つまり一般教育科目と考えることによつて一般教育と専門教育という従来の枠を越え、両教員がカリキュラムについて話し合う場をつくることが急務である。

示村悦二郎氏も木内氏同様一般教育と専門教育の区分の非現実性を指摘され、大学は今後予想される社会の急激な変化、学問の急速な進歩にもかかわらず、大学として変わるこたない教育目標に則つてカリキュラムを組織化、体系化するともに、プロの教育者としての「大学教授法」の研究が必要であると主張された。大学はいまや教授を中心とする学問研究の

場から学生の人格形成、教養を深めるための教育の場へと変化を迫られている。

パネル(2)では大学入試をめぐる根岸愛子氏の司会のもとに討論が行なわれた。発題者・関口研日曆氏は大学による「入学者選抜の時代」から学生による「大学選択の時代」へと転換が迫られている中で、現行の学力試験一辺倒の入試は再考を要すると以下のように主張された。「共通一次試験」は本来調査書・小論文・実技・面接などと並ぶ一つの資料として位置づけられていたが、その本来の意図が忘れられ学力試験だけで合否判定が下される。そこで共通一次の存廃を短絡的に論じる前に本来の意図を想起する必要がある。学力試験では一回限りの現時点の成績しかみることはできず、学生の将来性を判断するための十分な資料とはいえない。ただ調査書や小論文や面接の客観的評価は技術的に難しいが、各大学が追跡調査などを積み重ね、独自の合理的基準を設定することによって個性的な将来性のある学生を入学させることができるだろう。

また、入学試験研究主任石川光男氏は現行の学力総合得点主義を改善し、学生の多様な能力をみるための具体案を提示された。総合得点によつて一列に並べて合否判定をする「一元的評価」から、ある科目が優秀なら他の科目の得点が悪くても優先する、またある科目の中でも単に総合得点だけで決めるのではなく複数の尺度を設けて多面的に判定する「多次元の評価」へ入試のあり方を変えていく。具体的に言えば、情意領域は

法人ニュース

記念事業特別委員会

の発足

20周年記念事業計画

立案のために

昭和58年11月21日開催の理事会・評議員会において、決定された大学セミナー・ハウス創立20周年記念事業を検討するため設置する記念事業特別委員会の委員には、中川理事長の選任、委嘱により次の10氏が就任した。

- 館長 中川秀恭 / 常務理事 楠川 絢一 (東京都立大学総長) / 常務理事 鈴木皇 (上智大学教授) / 常務理事 崎田直次 (中央大学教授) / 理事 村山松雄 (東京国立博物館長) / 評議員 井出源四郎 (千葉大学長) / 運営委員長 評議員 川原栄峰 (早稲田大学教授) / 運営委員 評議員 岡宏子 (聖心女子大学教授) / 運営委員 宇野重昭 (成蹊大学教授) / 専務理事 吉川孔敏

第1回記念事業特別委員会は、昭和58年12月12日丸の内銀行倶楽部で開催、委員長に中川館長が選任され、特別顧問には茅誠司、小山五郎、飯田宗一郎の三氏が委嘱された。さらに記念事業特別委員会内規、記念事業の趣旨、事業の重点となる国際交流館(仮称)の建築内容などについて、具体的な検討が行なわれた。当日、承認された「記念事業特別委員会内規」の要旨は次のとおり。①委員長は理事長の諮問に応じ、創立20周年記念事業について

審議し、理事長に答申する。②委員は10名以内とし、理事長が委嘱する。③委員会に委員長および副委員長一名を置く。④委員会に特別顧問若干名を置き、必要に応じて、委員長に助言をする。⑤委員および特別顧問の任期は、記念事業の終了までとする。⑥委員長が必要と認めるときは、委員以外のもので出席させることができる。

第55回理事会、第36回評議員会

昭和58年11月21日 銀行倶楽部

出席者

- 出席者 中川秀恭、中村哲、井資長、平野龍一、楠川絢一、松田武彦、三宅彰、鈴木皇、崎田直次、小山五郎(代理星野欣也)、吉川孔敏

△評議員 川原栄峰、小川芳男、岡宏子、井出源四郎、大東百合子、田中未来、中島正樹、内藤誉三郎(代理吉田壽雄) 委任状による者 理事九名、評議員六三名(敬称略)

理事会・評議員会は中川理事長が議長となり、議事に入る。吉川専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のうち、異議なく各案件を承認可決した。 △評議員人事案について 学長交代により、一橋大学長種瀬茂氏の新任。宮澤健一氏の退任。なお中川秀恭、中村哲の両氏は学識経験者として留任。 ▼役員人事案について 一橋大学長種瀬茂氏の理事就任。宮澤健一、中村哲両氏の理事

退任。

20周年記念事業の件

当ハウスの開館20周年記念事業を検討の結果、次のように決定した。①記念事業特別委員会を設置する。特別委員会を設置に当たっては、委員会規則を作成する。メンバー構成は委員10名程度および特別顧問を若干名とし、その人選は理事長に委嘱する。②募金計画については、募金目標額を5億円とし、その事業計画の内容は今後さらに詰めて検討する。また募金委員会については、三井銀行の小山理事と協議の上、募金委員を委嘱する。

運営委員会に新メンバーが就任

大学セミナー・ハウスの運営全般について審議し、意見具申する運営委員会のメンバーに、次の二氏が追加して委嘱され、運営委員は七名となった。 東京大学教授 木村尚三郎氏 日本女子大学教授 山本和代氏 運営委員会は58年度も4月より毎月一回、定例的に開催している。交友館や食堂経営の問題、既存建物の見直し・補修改善策、ハウスの今後のあり方、20周年記念事業構想等、ハウスの当面する問題から長期の構想まで、幅広い範囲にわたって毎回熱心な討議が行なわれている。

【開催状況】 ①4月18日当ハウス ②5月27日私学会館 ③6月20日当ハウス ④7月22日当ハウス ⑤9月19日当ハウス ⑥10月17日当ハウス ⑦11月14日大隈会館 ⑧12月15日当ハウス

別にして認知領域の能力を多面的に評価できる入試問題を作成し、各大学の教育目標に照らして合格者を決める。現行の多肢選択方式による学力検査の中で学生の能力を多次的に評価する努力をしていかなければならない、と主張された。機会均等、評価の客観性、事務処理の能率という点からも現行の多肢選択方式による学力検査は是認せざるをえないが、それが初等・中等教育に及ぼす影響、能力の一面の評価などを考えると学力試験の比重を相対的に軽減し、他の資料とのバランスをとることが重要である、という方向に議論は収斂した。 最終日は蟻山道雄氏の司会による総括討論が行なわれた。紙面の

寄贈図書

昭和58年6~10月

- 「早稲田フォーラム」41 早稲田大学総長室広報課殿
- 「政治経済史学」200 彦由一太殿
- 「独学人生のすすめ」実践・経営計画 他一冊 産業能率短大殿
- 「早稲田法学」58巻2号 早稲田大学法学会殿
- 「国際協力」7月号 国際協力事業団殿
- 「金融経済」199~200 金融経済研究所殿
- 「現代詩研究」308 現代詩研究所殿
- 「文学と教育」 文学教育研究者集団殿
- 「人間の建築」建築のこころ 代謝建築論 他九六冊 松井源吾殿

関係でその詳細は報告できないが、①大学の社会的・歴史的使命、②小論文・内申書など学力検査以外の資料の扱い方、③一般教育の位置づけ、④教育効果の評価、⑤学生による授業の評価、⑥教授法の問題など多方面にわたる討論が展開された。こうして一泊二日の限られたプログラムにもかかわらず個別具体的な問題から大学のレーゾンデートルまで、戦後の高等教育の到達点を確認しながら、大学の将来像について国私の壁を越えて徹底的に議論できたことは大きな収穫であった。なお詳細は企画室発行の「第20回大学教員懇談会記録書」(実費頒布)をご覧ください。

- 「紀要」6 アメリカ・カナダ 大学連合日本研究センター殿
- 「英米文学評論」東京女子大学殿
- 「研究論叢」20 工学院大学殿
- 「Asian Culture」35 エネスコ・アジア文化センター殿
- 「新しき村」8~9月 安達義明殿
- 「自由管理制度の変遷と社会的統合」 笠原正成殿
- 「南北問題」 和田 実殿
- 「大学研究ノート」 広島大学大学教育研究センター殿
- 「歴史と未来」10 中嶋嶺雄殿
- 「現代天文科」 江沢 洋殿
- 「カナダ研究年報」一九八三年 日本カナダ学協会事務局殿
- 「社会科学研究」27、「人文自然科学研究」24 早稲田大学社会科学部学殿

事業部だより

58年10・11月

秋のキャンパスから

私立大学の夏季休暇の終了(9月下旬)とともに、春から夏へと続いたハウス年度前半の最盛期も一段落。授業が軌道に乗り、学園祭もある秋10・11月は、大学関係の利用が週末を除いてぐっと少なくなる。代わって、秋は学会・研究会集会のシーズン——今年も全国規模、そして大学の枠をこえての諸集會を迎えた。利用状況を数字で示すと次のとおりである。

グループ数	宿泊延人数	定員比
10月 八八	三、五六四	四四
11月 九〇	二、一一二	三七

●個別大学の利用

各大学の合宿は別掲の『利用状況』にあるとおりであるが、いわゆるゼミ合宿の他に、独自の企画による集會も少なくない。昨年会員校に加盟された東京電機大が電気通信工学科の新入生セミナーと応用理化学科のクラス懇親ミーティングで、積極的に利用された。恒例化した集會には一八年目の順天堂大「病院業務改善セミナー」(今年も有山理事長、宮崎学長ら一一〇名が来館)、春・秋の開催ですでに九回目を迎えた国際基督教大の「ICU学生セミナー」(留学生と日本人学生が「価値観」をテーマに討論)などがある。

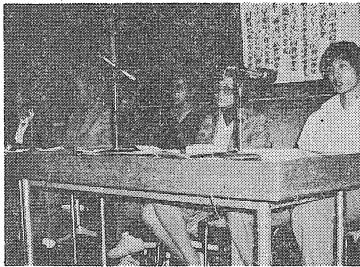
なお、本号の『わたしたちの合宿』には、昭和41年以来一八年間秋の合宿を続けてこられた東京都立大の「遺伝学ゼミ」にご登壇願ひ、長年の千人会員でもあられる大羽滋教授に別掲(11ページ)の一文をお寄せいただいた。

●「大学連合」の集會

例年秋は大学の垣を越えた集會が目立つ。中東問題討論会として「全日本学生英語討論会」(一一大学)、共同セミナーから生まれて今年六月目の「現象学・解釈学研究会」(二七大学)、「絶縁材料若手セミナー」(九大学)、「海洋化学若い人シンポジウム」(一三大学)、国際経済商学学生協会全国会議(二八大学)など。ハウス主催の大学教員懇談会(三一大学)と国際学生セミナー(二七大学)も、無論大学間交流の定例行事である。

●全国規模の学会、研修会

この秋最大の集會は「一九八三年度日本地球化学会年会」で、10月中旬に二泊三日、全館貸切り、



パネル討論「日本の大学」に参加する各国の留学生——留学生担当者研修会(講堂)

で開催された。全国からの参加者は、大学教授・研究者(約八〇%)、国立公立研究所員(一五%)、学生(五%)など計二〇八名(日帰りの参加を含めると最大三五〇名。計二一九件におよぶ研究発表が四つの会場で繰り広げられ、中日には総会と貝塚爽平・東京都立大教授による特別講演(写真下)が行なわれた。参加者は懇親の夕食会、夜の交友館や宿舍など、会場外でも自由に情報を交換し、交流した。

この学会年会は八年前の秋にもハウスを会場にして開催されているが、当時も学会の中核であった半谷高久・東京都立大教授が今回の集會を再びハウスで開催することを積極的に推進された。なお、千人会員としてハウスとご縁も深い半谷教授にお願いして、同学会の模様をご報告いただいた(下掲)。

他に全国的な集會としては、一三年ぶり三度目の「留学生担当者研修会」と、すでに恒例となった「厚生補導事務研修会」の開催がある。ともに文部省の主催(前者は日本国際教育協会、留学生問題研究会との共催)、前者には国公私立大学、高専、専修学校など一一六校の留学生担当職員ら計二六名が、後者には国立大六四校の学生部関係職員ら計六六名が参加した。「留学生の受入れと派遣に伴う諸問題」を検討した留学生担当者研修会では、日本の大学「在日留学生から見た日本の大学」も設けられ、中国、マレーシア、フィリピン、韓国、米国からの留学生が討論に加わった(写真上)。

日本地球化学会

年會を開催して



東京都立大学教授 半谷 高久

昭和58年10月17、18、19日の三日間セミナー・ハウスの宿舍や講堂などを独占して、日本地球化学会年會を開催した。この会は現在約八〇〇名の会員を数え、宇宙地球にわたる森羅万象すべてを学地の立場から研究することが目的である。地球化学の発祥は古く一八〇〇年代に遡るが、本会の母体日本地球化学研究会が発生したのは、昭和10年代の中頃である。当時の会員は恐らく数十名であったろう。今昔の感を深くする。

地球化学研究の範囲は広く、今回の講演発表は二一九件に達し、宇宙のはじめから、人間活動にまで及んでいる。その中で、今年は課題講演として、社会地球化学および有機地球化学を選んだ。前者は人間活動が地球上の物質の存在形態、変化、循環にどのような役割を演ずるかを研究目標とし、環境汚染のメカニズムの解析などもその中に含まれる。後者は有機化合物の地球上の挙動に関連した地球現象の解明で、たとえば石油の生成機構、地球上に最も多量に存在する有機物でありながら、正体が未だよくはわからない腐枯質の構造やその生成機構など研究課題が山積している。

地球化学の研究は、互いに密接に関連している。したがって、その発展には研究者間の交流が特に必要である。セミナー・ハウスを

会場に選んだのも、この交流の重要性を意識したからである。講演会場での討論は、残念ながら持ち時間制限があつて、意を尽せない。従つて、会場外の食堂、ロビー、宿舍での昼夜を通じての自由な会話が重要である。

八年前にも、私たちが当番校で、この地球化学会年會を当所で開催し、環境面、施設面で評判が大変良かった。今回は参加者三五〇名、宿泊者二〇八名で、前回にま

率直に言つて、時代が変わり、野性味が求められるユニット・ハウスの設備も、特に女性会員にとっては不十分であるなど、問題が無くはない。しかし、多様な施設の活用などを工夫すれば、セミナー・ハウスはこのよう大きな規模の学会にも好適な会場となり得るのである。



貝塚爽平都立大教授による特別講演「東洋の生い立ちと人工改変」(講堂)

中央大学講師 島田 雅子
早稲田大学教授 田村 恭
上智大学平和を考える会
順天堂病院業務改善セミナー
東海大学教授 師岡 孝次
東京都立大学助教授 国井 隆弘
早稲田大学教授 川原 栄峰
早稲田大学教授 加藤 栄一
東京理科大学教授 近藤 保
東京電機大学電気通信工学科新入生ゼミ

日本大学小林研ゼミ
学習院大学フランス会部
学習院大学教授 川路 神治
大妻女子大学講師 宮崎 清孝
上智大学スペイン演劇研究会
明治大学教授 石井 常雄
早稲田大学講師 野村タチヤーナ
都立立川短大教授 吉田 幸弘
産業能率大学助教授 山田 善靖
東京YWCA専門学校英語科
経済地理学執筆会議
世界経済研究会
第13回絶縁材料の若手セミナー
第20回大学教員懇談会

予 告

▼第128回大学共同セミナー

主題 ことばと身ぶりの記号学
期日 昭和59年5月25～27日
△全体講義▽
東京外国語大学教授 山口昌男氏
△ゲスト講演▽
作家 井上ひさし氏
△パネル・演習指導▽
立教大学教授 前田 愛氏
国学院大学教授 佐藤信夫氏
京都大学助手 浅田 彰氏
東京外国語大学助手 中沢新一氏
東京大学教授 池上嘉彦氏
(運営委員)

▼第5回大学院共同セミナー

主題 進化論—その功罪と現代に
おける再検討—
期日 6月29日～7月1日
△指導教授・テーマ(仮題)▽
A化石が語る生物進化の証拠(速水格氏)／B人類の進化—分子進化と表現型進化—(尾本恵市氏)／Cソニンバイオロジ—と進化論(岸由二氏)／D進化論前後—十八世紀のイギリス・リベラリズムはなぜ変質したか—(小浪充氏)／Eさまざまな社会進化論(筑波常治氏)／F社会ダーウィニズムの行きつくところ(米本昌平氏)

国際経済商学生協会の
海洋化学若い人シンポジウム
オートマン研究会
留学生担当者研修会(文部省、日本国際教育協会、外国人留学生問題研究会)
第10回国際学生セミナー
日本地球化学会年会
高橋聖書集会
東京YWCA
自我と関係論
日電アネルバ**
アイワールド*
J・W・トンブソン・カンパニー*
日本電気
小西六写真工業*
京王百貨店
日本フードサービスチェーン協会
富士エドックスオプティクスサプライ
富士土地
埼玉銀行従業員組合
日野協力会
花王石鹼
ベスト
東急百貨店労働組合本店支部

松下電器産業
富士電機製造
〔個人利用〕
共立女子大学助手 新井 美園
同 日暮 純子
法政大学名誉教授 中村 哲
女子聖学院短大講師 浜田 辰雄
東京学芸大学教授 杉山 吉茂
11月
(90グループ、延二、八九二人)
東京都立大学教授 半谷 高久
成蹊大学教授 対木 隆英
青山学院大学教授 岸 英朗
中央大学講師 山本 武利
早稲田大学教授 片岡 寛光
慶応義塾大学助教授 唐木 円和
東京都立大学助教授 加藤 宏
早稲田大学教授 遠山 一郎
国際基督教大学ステューデント・セミナー
立正大学講師 大津 悦夫
早稲田大学政経学部3・5法律研
中央大学教授 高柳 先男
東京都立大学助教授 石井 昭
東京大学司法試験勉強会
明星大学教授 中田 重厚
中央大学教授 吉村 二郎
青山学院大学教授 佐藤 和男
学習院大シエイクスピア劇研究会
津田塾大学シエイクスピア研究会
東京都立大学助教授 大塚啓二郎
東京電機大学教授 井関 昇
東京電機大学応用理化学科クラス
懇親ミーティング
成城大学教授 野口 武徳
工学院大学助手 中村 納
東洋大学教授 飯島 宗享
東京都立大学教授 倉沢 進
明治大学助教授 松瀬 貢規
早稲田大学Aモデル研究会
早稲田大学教授 鈴木 恂
中央大学経済学会

中央大学教授 下村 康正
埼玉大学社会科学総合演習ゼミ
工学院大学講師 伊藤 光雄
芝浦工業大学講師 吉田 峰夫
慶応義塾大学教授 有賀 一郎
慶応義塾大学教授 石川 明
津田塾大学教授 長岡 亮介
中央大学教授 桑田 三郎
青山学院大学キリスト教学生会
上智大学教授 高野 雄一
法政大学助教授 廣田 明
武蔵大学教授 小川 正恭
中央大学対日イメージ研究会
中央大学教授 林 昇一
一橋大学教授 石 弘光
工学院大学助手 渡辺 克忠
明治学院大学助教授 竹内 真一
明治学院大学助教授 小野 哲郎
東京都立大学生物学ゼミ1・2年
東京都立大学生物学ゼミ3・4年
東京電機大学教授 小谷 誠
東京都立大学助教授 大羽 滋
中央大学教授 五井 一雄
筑波大学工学実地指導
淑徳大学米川・金子・千徳ゼミ
静修短期大学バレーボール部
高千穂商科大学学友会
桜美林大学助教授 大木 昭男
日本ルーテル神学大学神学教育委員会
日本女子大付属高校
青山学院高等部修養会
全日本学生英語討論会
厚生補導事務研究会(文部省)
放電研究グループ
日本国際学生協会
現象学解釈学研究会
第6回大学共同セミナー
第124回大学共同セミナー
国立西埼玉中央病院附属看護学校
第7回日豪合同セミナー(日豪学術文化センター)

小西六写真工業*
サミットストア
興亜火災海上火災保険
経営システム研究会
日本フードサービスチェーン協会*
テンスター開発
東芝回路部品エンジニアリング
アイワールド*
京王百貨店
全大丸労働組合八王子支部
日電アネルバ
富士電機半導体
グリーンハウス
日本水産
〔個人利用〕
日本流星研究会 石井 秀夫
東洋大学教授 堀 光男
●編集後記
お忘れながら、新年の第一号を送りますが、昨秋は、ハウスのプログラム活動の四種類すべてが連続して開催されることになり、それぞれ特色のある活動が展開されました。その一つ一つは紙面の制約があつて丹念にご紹介できないのが残念です。セミナーに参加した学生たちのアンケートの中に「精神的にも肉体的にも、大学生として勉強したという実感をもった」が目にとまりました。学問の営為が身体と切り離せないことを、ハウスのキャンパスで体験した一学生の、これは簡潔な表現です。

事業部だよりにご紹介したように、昨秋の最大規模の集会は、日本地球化学会年会です。世話役の半谷高久都立大教授は、「研究者間の交流の重要性を意識してハウスを会場に選んだ」と推賞の弁を寄せて下さいました。(能)